

【曲目解説】

「西洋絵画、どこから見るか？」展 記念コンサート vol.1

文・古橋潤一

今回演奏するのは、17世紀～18世紀にかけてスペインで作られた、オルガン（または鍵盤楽器）のための曲です。アンサンブルで演奏するのに「なぜ、鍵盤曲を？」と思われる方もいらっしゃるでしょう。筆者の知る限り、この時代はオルガン（鍵盤）曲、ヴィウエラ（ギターのような形の撥弦楽器）曲、歌曲、合唱曲しか楽譜が残されておらず、スペインで出版されたものに、その他の楽器のための曲は見つかりません。しかしながら、ヴァイオリンのような弦楽器やリコーダーを含む数多くの管楽器は、当時のスペインにもありました。弦楽器や管楽器があれば、弾きたいと思うのは人情というもの。当時の曲を別の楽器で（しかも大人数で？）演奏していたと想像するのはとても面白いことだと思います。本日のプログラムにあるファン・カバニーリエスの作品は、この曲を演奏するには指がもう数本、もしくは手がもう1本ないと難しいのでは？と思われる曲もあります（彼の曲には5声部の曲があり、それぞれの声部が独立した五線に書かれてあるので、とても複雑です）。

ところで、曲名に「Tiento（ティエント）」と付いているものが何曲かありますが、これはスペインやポルトガルで「器楽の曲」を表していると思われます。ティエントのなかでも特徴的なオルガン曲の一つが、タイトルに「medio registro（メディオ・レヒストロ）」と付けられた曲です。このメディオ・レヒストロとは、スペインやポルトガルのオルガン独自の「ストップ」の名称です。皆さんも教会や大きな演奏会場にあるオルガンをご覧になったことがあると思いますが、鍵盤の両側にたくさん付いているレバーのようなスイッチが「ストップ」で、その役割を簡単に言うと、いろいろな音色を鍵盤に割り振ることです。例えば、このストップを入れるとフルートの音、こちらはトランペットの音など、一つのストップにそれぞれ音色が割り振られていて、それを足していくことでオルガニストは独自の音色を作って演奏するのです。さらにスペインには独特なシステムがあり、真ん中の「ド」の音を境に、上声部と下声部に違う音色をあてがうことができます。そして上下どちらかに派手な音色をあてがってソリスティックにすることで、まるでソロと伴奏を一人で演奏しているかのように聴かせるのです。これが「メディオ・レヒストロ」というストップの特徴であり、タイトルにその名称がついている楽曲は、これを用いて演奏されました。今回のプログラムではコレア・デ・アラウホの楽曲がそれに相当します（この2曲は上声部がソロになっており、そのソロ・パートが二声で書かれている珍しい曲です）。

さて、この時代のオルガン曲にはもう一点、現代と異なる点があります。それは楽譜です。現代の楽譜は五線にオタマジャクシ（音符）で書かれていますが、この時代のオルガン曲はギターのタブ譜のように数字で書かれて出版されています。線は各声部1本で、その本数が声部の数を表します（例えば、線が3本あれば3声の曲）。そして音は数字で表され、リズムが変わると上に音符でリズムが書いてあります。文章で説明すると難しいので、本日演奏するアラウホの曲の楽譜をご覧ください（図1）。ちなみに、これを現代の楽譜に直すとうなります（図2）。筆者はこの楽譜を初めて見た時、どのような音になって出てくるのか、とてもワクワクしました。ただ、このタブラチュアを見ながら演奏するのは自分たちには至難の業なので、実際は五線譜に直すところから始まるのですが、それはまるで翻訳の作業のようで、最後まで直し終わると、パズルを解いた時のような充実感が得られます。

このように、古い音楽を演奏したり聴いたりする際には、当時の生活や文化を知ったり、想像したりすることで、一段と深く音楽を楽しむことができるのではないのでしょうか。このように、古い音楽を演奏したり聴いたりする際には、当時の生活や文化を知ったり、想像したりすることで、一段と深く音楽を楽しむことができるのではないのでしょうか。

☒ 1

FACULTAD ORGANICA

TIENTO DE MEDIO

REGISTRO DE DOS TIPLES DE SEGUNDO TONO,
re, y sol, por de la solite, del genero diatonico a cinco voces, y segú mi fe que la
y de algunos doctos, a cinco deuen ser estos registros de dos tiples, y no a qua-
tro; (salva pace peritilissimorum virorum qui contrariam assequuntur) la ra-
zon es: porque lo menos que se puede tañer es a tres voces, y los de la contra-
tia hazen duo toda la entrada, y la reticencia de los tiples, tañido defectuoso
por muchas razones, y mas defectuoso si se sigue passo: porq es necesario que-
darle en sola vna voz, o que nunca agüarden paula los tiples que será mayor
defecto. Estos y otros muchos tiene que por no alargarme no pongo. Item
buelvo a dezir: que medio registro de dos tiples por de la solite, es de segundo
tono, y a vezes de septimo, y nunca de primero, segun lo dixi en los de vn ti-
ple, y de baxon por el dicho signo. El diapaton es harmonico, y procede den-
de de la solite lo grave diziendo: re, mi, fa, sol, re, mi, fa, sol.

DEL MAESTRO CORREA.

☒ 2

Francisco Correa de Arana

TIENTO de medio registro de dos tiples de SEGUNDO TONO

FC de Arana Tiento de MR de Tiple de Basso